

## 英語の高大連携授業への挑戦

### 高 階 悟

#### I. 高大連携授業とは

大学・短大の教員が高校生を対象に取り組む教育活動に対する名称は、「高大連携」、「高大接続」、「高大の接続教育」、「高大連携事業」、「高大連携活動」、「高大連携授業」などさまざまである。高大連携授業の契機は、文科省が一連の教育改革の中で1998年に「大学等での科目等履修生、聴講生としての学修を高等学校の単位として認定可能に」（学教法施行規則第63条の4等）する制度を導入したことである。その制度改正を受けて中央教育審議会（中教審）が1999年に「学生が高校教育から大学教育へ円滑に移行できるよう、両者の教育の連携を拡大する」具体的な方策を提案した。その方策は、3つにまとめることができる。第一は高校における進路指導活動の一環として大学の専門性のある講義の受講である。第二は高校生が大学教育へ円滑に移行できるようにするための大学側のさまざまな取り組みである。第三は高等学校関係者と大学や短大教育関係者が情報交換し、理解を深めるための「連携協議会」の設置である。第三番目の中教審の提言を受けて、全国各地に「大学コンソーシアム」が設置された。秋田県では2005年に「大学コンソーシアムあきた」が設立され、14校の高等教育機関が加盟し、高校生を対象にした高大連携授業、県民を対象にした市民公開講座、県内大学・短大の単位互換授業などを実施している。このように「大学コンソーシアム」は、高大連携授業のみならず、大学や短大の社会・地域貢献という役割も担っている。

高大連携授業は、実施母体（高等学校、大学・短大、第三者機関）の目的によって実施形態や実施期間はさまざまである。高大連携授業は、実施形態によって「狭義の高大連携授業」と「広義の高大連携授業」の二つに分けることができる。「狭義の高大連携授業」は、文科省が導入した「大学における学修を高校の単位として認定する制度」を利用した取り組みである。この高大連携授業は、高校側からの積極的な申し出が多く、文科省の報告によれば2000年の単位認定実施校は49校で、2010年には428校に増加している。理系大学と高校との連携としては、文科省が「科学技術創造国」を目指して科学技術や理科教育を推進するSSH（スーパーサイエンスハイスクール）指定の事業がある。2002年の事業開始当初のSSH指定校は26校で、2012年には178校に増加している。SSH指定校は、文科省からの予算を利用して高校生が大学の研究室等を訪問したり、大学教員が高校で専門性の高い講義をしたり、さまざまな形態の交流が実施されている。

「広義の高大連携授業」は、大学と高校がお互いに連絡を取り合い、大学の教員が高校に向いて大学レベルの講義の実施や、高校生が大学を訪問して公開講座や特別の授業を受ける取り組みである。この高大連携授業は、高校生が大学教育へ円滑に移行できるようにするための大学側のさまざまな教育活動である。この目的は、大学を知り、大学の雰囲気味わうことから、大学の専門分野の講義の受講、高校生の学力向上を目指した学習支援など多種多様である。具体的には、ほとんどの大学や短大が実施して

いるオープンキャンパス、大学主催の公開講座、出前講義や出張講義、体験入学、入学前教育や新しい試みのウィークデー・キャンパス・ビジットなどをあげることができる。ここ数年、少子化による18歳人口の減少と大学進学率の上昇の影響を受けて、高大連携授業は、全国の国公立大学783校の学生確保と新入生の学力向上のためにさまざま授業や講義が企画され、事例が急増している。

秋田県立大学の秋田キャンパス（生物資源科学部）で2008年から実施してきた5年間の英語の高大連携授業を紹介したい。

## II. 英語の高大連携授業の開始

秋田県立大学では、入学者の学力低下と一部の学生の高校での理系科目の未履修が問題になり、2001年より新入生を対象にリメディアル教育を開始した。また、2005年には「大学コンソーシアムあきた」が開設され、秋田県内の高校生を対象に科学や生物学への興味を高め、進路について考える機会を提供する高大連携授業が始まった。秋田県立大学は、開設時より理工系や生物系の講座を市内の「カレッジプラザ」で開講した。毎年、すべての教員に高校生を対象にした「大学コンソーシアムあきた」での講義開講の依頼があった。

秋田県立大学の英語教育の目玉は、CALL（Computer Assisted Language Learning）である。英語の高大連携授業は、市内の「カレッジプラザ」での開講ではなく、大学構内のCALL教室のコンピュータを利用した授業を企画した。2007年、秋田県立大学に隣接した普通高校の英語教員に協力を打診し、2008年7月下旬、秋田県立大学のCALL教室での高大連携授業の実施が可能になった。授業担当者は、英語教員1名と英語の助手、授業後のキャンパスツアーは、入試関係の事務職員が担当した。

2008年の英語の高大連携授業の目的は、「高校生が大学を訪問し、大学の設備を利用し、体験授業を通じて進路の選択の際に、秋田県立大学に関心を持ってもらう」とした。最初の試験的な高大連携授業「コンピュータを利用した英語学習」には、隣接した普通高校1校（大学進

学率44%、平成21年）の2年生32名が参加した。実施形態や実施期間は、「大学コンソーシアムあきた」の形式に従い7月23日(水)～27日(日)の5日間で、一回90分で実施した。最初の高大連携授業は、大学の充実した教育機器を利用して英語の授業体験と、高校の進路指導の夏期補習授業または「高校生の進路選択の支援」を担う役割も果たした。5日間の授業の内容は、第1日目には大学のCALLの授業体験として、ディクテーション、英語でのチャット、語彙診断テスト（JACET 8000）を行い、残りの4日間は有料の英文自動採点・自動添削ソフト（CASEC-GTS: Computerized Assessment System for English Communication - Grammar Tutoring System）を利用した。自動添削ソフト（CASEC-GTS）は、和文英訳の問題をキーボード入力で解答し、アニメーションによる細かい添削を受けながら、英文を完成させる学習システムであり、高校生は楽しみながら取り組んでいた。

秋田の地方新聞の記者が取材に来て、「秋田魁新報」に高大連携授業の様子が「一味違う英語教育体験」として紹介された。その記事の中で、受講した高校生は、「パソコンを使った英語の授業は初めて。最初は少し難しかったが、手で書いて勉強する普通のやり方と違って面白かった」と感想を述べていた。5日間の高大連携授業の後、大学が実施した高校生へのアンケートの結果、「楽しみながら授業を受けることができた」の記述が多く、自動添削ソフト利用については「パソコン・ソフトを使って英作文を作る授業は、楽しく英文法を覚えることができ良かったです」と書いている高校生がいた。全体的な感想として、「普段の高校の授業とは異なるパソコンを利用した授業は、面白かった」という記述が多かった。最初の英語の高大連携授業への挑戦は、コンピュータを利用した英語の授業体験や「高校生の進路選択の支援」の側面では成果があったが、秋田県立大学の英語教育の側面、特にリメディアル教育との関連では成果が少なかった。この反省を踏まえて、2回目の高大連携授業では、対象となる高校を変更し、秋田県立大学を希望する推薦入試の入学者の多い県内農業系高校にした。

2009年の高大連携授業の目的は、「生物資源科学部は、農業系高校の進学先であることから、県内農業系高校生の英語力の向上を図るため、コンピュータを使った英語学習を行う」とした。秋田県内の農業系高校に呼びかけたところ、農業系高校3校から34名（2年生7名、3年生27名）が参加した。授業内容は、前回と同じく大学のCALLの授業体験と有料の英文自動採点・自動添削ソフトの利用で、実施期間は、高校生が夏休みに入った7月23日(木)～27日(月)までの5日間にした。2回目の高大連携授業に秋田の地方新聞の記者、またテレビ3局が取材に来た。夕方の秋田朝日放送テレビのローカルニュースで「農業高の生徒が県大で英語学ぶ」のタイトルで、高校生がCALL教室でディクテーション、語彙診断テスト（JACET 8000）、そして英語でチャットをしている様子が紹介された。

テレビの女性アナウンサーは、「県立大学を志願する農業系高校では、カリキュラム上普通高校より英語時間が少ないため、英語力を高めるために参加した」と農業系高校生の英語の体験授業の意義を説明した。この高大連携授業は、大学レベルの専門性の高い授業を提供するのではなく、県立大学を志願する高校生への学習支援というリメディアル教育の一環として取り組んだ。大学1年生のリメディアル教育の「基礎講座」対象者は、ほとんど県内高校出身者であり、県内高校生が大学教育へ円滑に移行し、大学を4年間で卒業するために大学の英語学習内容を早めに体験する意義は大きい。この年、高大連携授業の3年生の受講者27名中、約55%の15名が秋田県立大学の推薦入学試験に合格した。その後、15名は11月の推薦合格者の学習説明会を受け、主要3科目（英語、化学、生物）の2月と3月のスクーリングを受講して、4月には大学1年生になった。

2010年3回目の高大連携授業は、「秋田県立大学に隣接する高校等によるコンピュータを使った英語学習」という名目で企画した。対象の高校は、県立大学を志願する農業系の高校と県立大学に隣接した普通高校にし、実施期間は7月23日(金)～25日(日)までの3日間に短縮した。授業内容は、前回と同じく大学のCALLの授業体験と有料の自動添削ソフト（CASEC-GTS）を

利用した英語の授業体験である。参加した高校は、4校（普通高校1校、農業系高校3校）で、高校生は、33名（2年生13名、3年生20名）参加した。この年、高大連携授業の3年生の受講者20名中、50%の10名が推薦入学試験に合格した。

このように対象高校や期間について試行錯誤を繰り返し、3回の高大連携授業を通じて、参加高校が定着し、秋田県立大学を希望する高校生を対象にした入学前教育と地域貢献としての高大連携授業の形態が定着した。

### Ⅲ. 入学前教育としての高大連携授業

2011年4回目の高大連携授業は、今までの経験を踏まえて「秋田県立大学に隣接する高校等によるコンピュータを使った英語学習」という名目で企画した。しかし、3月11日に東北地方を襲った未曾有の自然災害の東日本大震災が発生し、大学の入学式が例年より2週間遅れ、授業も遅れて開始したため高大連携授業の実施形態や実施期日も変更せざるを得なかった。実施期間を短縮すると共に経費節約を兼ねて有料の自動添削ソフト（CASEC-GTS）を止めた。対象の高校は、前年同様に県立大学を志願する農業系の高校と県立大学に隣接した普通高校にし、高大連携授業の実施期間は7月23日(土)1日間にした。参加した高校は、3校（普通高校1校、農業系高校2校）で、高校生は、26名（2年生17名、3年生9名）参加した。この年、農業系高校の行事と重なり、3年生の参加者が少なかった。3年生の受講者9名中、約55%の5名が推薦入学試験に合格した。授業内容は、大学のCALLの授業で実施している英語のチャット、語彙診断テスト（JACET 8000）に、新たにインターネットのサイト「自律的英語学習」（Many Things: <http://www.manythings.org/>）を加えた。実質的に、4回目は教職員の労力と大学の経費を節約した形態に落ち着いた。さらに、大きく変わったことは、今までの担当は、英語教員の私と英語助手1名にキャンパスツアーと大学案内配布を担当する事務局スタッフでしたが、新任のネイティブの英語教員の協力が得られて授業担当教員が2名になったことである。最初の高大連携授業の時から、秋

田キャンパスの同僚の英語教員に協力を求めたが、「日程の都合がつかない」、または「大学コンソーシアムあきた」で高大連携授業を実施したいという理由で、英語全体での取り組みが実現しなかった。

4回目にして、英語教員の間で高大連携授業の意義を共有することができ、「県立大学を志願する高校生への学習支援」のための入学前教育として取り組むことができた。日本リメディアル教育学会監修の『大学における学習支援への挑戦』によれば、約70%の大学が大学全体の規模で入学前教育を実施しており、特にAO入試や推薦入学者の比率の高い私立大学では、合格発表から入学までの間に実施している事例が多い。一般的にリメディアル教育の一環として実施している入学前教育は、ほとんどが推薦入試の合格者を対象に入学数ヶ月前の学習支援の形態をとっている。大学教育は、4月の入学式以前のAO入試や推薦入試の合格者発表から始まっていると言っていることができる。秋田県立大学で実施してきた高大連携授業は、推薦入試の実施の数ヶ月前に、進学希望の高校生や県立大学を受験する可能性のある秋田県内の高校生を対象にした幅広い学習支援の入学前教育である。

入学前教育としての英語の高大連携授業の目的は、秋田県立大学を志望する英語が苦手な高校生または高校のカリキュラム上英語の時間数が少ない進学希望の高校生が「コンピュータを使った英語学習」の体験を通して、自律的な学習習慣を身につけ、語彙診断テスト（JACET 8000）を通じて自分の語彙力を自覚し、英語力の向上を目指すことである。

2012年5回目の高大連携授業は、前年と同じ「秋田県立大学に隣接する高校等によるコンピュータを使った英語学習」という名目で企画した。実施形態、実施期間は、前年と同じである。授業内容も、前回と同様にCALL授業で実施している英語のチャット、語彙診断テスト（JACET 8000）、インターネットのサイト（Many Things）を利用した「自律的英語学習」である。実施期間は7月22日(日)1日間にし、参加した高校は、4校（普通高校1校、農業系高校3校）で、高校生は、29名（2年生19名、

3年生10名）参加した。この年、3年生の受講者10名中、40%の4名が推薦入学試験に合格した。大きな変更点は、新任の若い英語教員の理解が得られて、授業担当教員が3名になり、秋田キャンパスの英語教員全員で入学前教育としての高大連携授業に取り組むことができたことである。英語教員の共通認識として、高大連携授業を通じて、秋田県立大学を志願する高校生の学習支援をし、大学教育が求める最低限度の英語力を明らかにし、高校生に自分の英語力の自覚を促すことにした。

最低限度の英語力とは、語彙診断テスト（JACET 8000）で中学生レベルの500を通過することである。2008年の高大連携授業を受けた普通高校2年生の場合、29名が語彙診断テストを受け、69%の20名が500レベル以上であった。2009年の高大連携授業を受けた農業系高校生の場合、33名が語彙診断テストを受け、43%の14名が500レベル以上であった。2010年の農業系高校生の場合、20名が語彙診断テストを受け、45%の9名が500レベル以上であった。2011年の農業系高校生の場合、8名が語彙診断テストを受け、62%の5名が500レベル以上であった。2012年の農業系高校生の場合、14名が語彙診断テストを受け、71%の10名が500レベル以上であった。この5年間の語彙診断テストの推移を見ると、普通高校生の約70%は、語彙力で500レベル以上に達していた。農業系高校生の場合、500レベル以上の高校生の割合が4年間の間に43%から71%に上がっている。この数字の変化は、農業高校側の参加者選考のためか、高校生のレベルが上がったためか、その他の原因かは判断が難しい。しかし、現実の問題として毎年、英語の語彙力で500レベル以下の高校生が大学に入学し、3年生への進級の際に英語の単位が取れずに留年する学生や学力不振で中途退学する学生がいることも事実である。

5年間の秋田県立大学の英語の高大連携授業を振り返って見ると、3つの特徴をあげることができる。この5年間で、進学希望の秋田県内の高校生約150名が夏休みに入った7月下旬に大学のCALL授業体験をした。最初の年は、高校2年生が対象のため、秋田県立大学への入学者がいなかったが、その後の4年間で、高大

連携授業参加者の3年生の約40%–50%が秋田県立大学に入学しており、農業系高校生の推薦入学者への学習支援または入学前教育として定着してきた。次に授業担当者に関して、最初の年は、他の英語教員の理解と協力が得られなかったが、4年目から秋田キャンパスの英語教員全体で取り組むことができた。高大連携授業の担当者は、休日出勤や授業の準備など負担増であるが、秋田県立大学を希望する高校生が大学教育に円滑に移行するための入学前教育としての認識を共有することができた。最後に、5年間継続して高大連携授業を実施したことにより、隣接する高校や推薦入試枠の農業系高校に秋田県立大学での「コンピュータを使った英語学習」が浸透した。それは、高大連携授業がメディアに取り上げられたためでもあるが、各高校の英語の先生、引率の先生、進路指導の先生、教頭先生、校長先生が実際にCALL教室での授業を体験または見学し、その意義を理解したためと思われる。

#### IV. 高大連携授業の課題

入学前教育としての高大連携授業の課題はたくさんあるが、ここでは3つの点について考えてみたい。第一は、学習効果の確認である。高大連携授業の受講者の学習効果を客観的なデータで確認することは、難しい。高校3年生の夏に高大連携授業を受けて大学に入学するまでに9ヶ月もあり、また受講者がすべて大学に入学することはなく、データが少ない。しかし、7月下旬の高大連携授業で語彙診断テスト(JACET 8000)の結果、500レベル以下であった高校生が、冬休みの自律学習、2月・3月のスクーリングを体験して、大学に入学した4月の語彙診断テスト(JACET 8000)で500レベル以上の結果をだしたケースもある。

毎年高大連携授業の後にアンケートを実施した。2012年の受講者29名(普通高校1校、農業系高校3校)のアンケート結果から学習効果を判断してみたい。最初の問いは「高大連携授業を楽しめましたか?」で、「とても楽しめた」から「楽しめなかった」までの5段階で回答をする形式である。

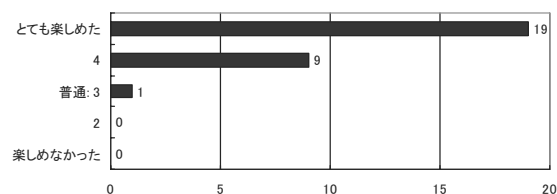


図1. 「高大連携授業を楽しめましたか?」

約97%の受講者が「楽しめた」と感じているようである。大部分の参加者が「楽しめた」ことは、学習効果があったと判断できる。

2番目の問いは「またこのような授業に参加したいと思いますか?」である。「とても参加したい」から「参加したくない」までの5段階で回答をする形式である。

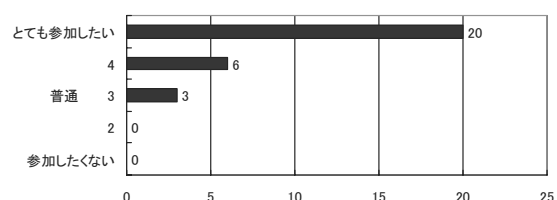


図2. 「またこのような授業に参加したいと思いますか?」

約90%の受講者がまた高大連携授業に「参加したい」と回答していた。参加者した高校生のほとんどが再び「参加したい」と答えており、有意義であったと判断できる。

次に記述式アンケートに対する回答を紹介する。第一は、「秋田県立大学での高大連携授業によって得た感想を書いて下さい」である。多かった感想は、「普段コンピュータを使用している授業がないため、貴重な経験となった」(他6名)、「自分の英語力がどのレベルなのか、また単語力を知ることができた」(他3名)でした。第二は、「今回の授業に参加して特に良かったと思う点はどのようなところですか?」である。最も多かった回答は、「大学で行っている授業形式を知ることができた」(他10名)でした。高校生にとっては、大学のキャンパス内で大学の教員の授業を受けることの意義は大きいようである。第三は、「今回の授業は、今後自分にどのような効果があると思われますか?」である。最も多かった回答は、「英語をさらに学びたいと思うようになった」(他16名)でした。高校生が、自分の英語力を自覚し、さらに英語を学びたいと決意したことから、学習効果

があったと言える。学習支援の高大連携授業は、高校生の学習意欲を高め、大学教育への移行を円滑にする手助けになっている。

第二は、実施形態と実施期間の問題である。理想は、大学全体としてできる限り多くの教職員が関わり、担当教員が楽しい双方向的な高大連携授業計画を企画し、連続性のある授業や講義を数日間に渡って行うことである。しかしながら、無報酬の高大連携授業を数日間実施することは、担当教員だけでなく高校生の負担も増えることであり、日程調整が必要である。現状では、高校と連絡を密にして出来るだけ秋田県立大学を志願する多くの高校生が参加できる日時を調整することである。この2年間は、教員の都合もあり、1日だけの高大連携授業であり、教員側は高校生の名前と顔を覚えるまでに至らなかった。しかし、高大連携授業を受けた高校生は、大学教員の顔を覚えており、入学後、廊下で出会った時に挨拶をする学生、英語の勉強法や学生生活などに関して相談に私の研究室に来る学生もいる。従って、1日だけの高大連携授業でも、県立大学を志願する高校生にとっては、大学の専任教員の授業を受ける機会であり、貴重な体験になっているようであり、教育効果はある。

第三は、大学教育の質保証、または学士力の保証の問題である。大学の設置に関しての規制が緩和され、新規加入がしやすくなった1991年の大綱化・弾力化以前は、文部省の「大学設置基準」による許可・監督を通してある程度、大学の質の保証が機能してきたと言える。しかし、1999年大学教育は「ユニバーサル段階」（大学への進学率50%以上）を迎え、新たな質保証が求められるようになった。文科省は2002年より「大学の質保証システム」について審議を開始し、2010年には日本学術会議の「大学教育の分野別質保証の在り方について」の報告者がでた。多様な学力の学生が入学する今日、それぞれの大学では、文科省の方針に対応して質保証のためのさまざまな取り組みが行われている。秋田県立大学でも2010年に大学側より英語教員に「英語の学力保証」を実現する英語教育体制を検討するように指示があった。英語教育改善研究委員会で1年間審議し、次のような報告書を提出した。秋田県立大学の英語教育の目標

(TOEIC 500点)を明確にし、理系大学のカリキュラムや教員配置などの問題を考慮して「保証すべき最低学力の設定」を検討する。

英語教育改善研究委員会の議論を受けて、2011年より新入生の英語力を客観的に判定するためと1年間の英語教育の教育効果測定のために外部検定試験の TOEIC Bridge (180点満点)の導入を決定した。2011年4月、秋田キャンパス(150名)実施の TOEIC Bridge の平均点は、128点で2012年2月の2回目の TOEIC Bridge の平均点は132点(TOEIC 換算 約350点)であった。一見すると平均点の伸びは、4点と少ないが、4月の TOEIC Bridge で100点(TOEIC 換算 260点)未満の学生が8名であったが、2月には2名だけになった。ある程度の英語力の底上げ効果が見られる。2012年4月、秋田キャンパス実施の TOEIC Bridge の平均点は、127点で2013年1月の2回目の平均点は135点(TOEIC 約355点)であった。CALL 教室でコンピュータを使った TOEIC 対策の教育ソフト(ATR CALL)を利用した効果のため前年に比べて平均点が8点伸びた。2012年度の TOEIC Bridge で100点(TOEIC 260点)未満の学生は、4月には8名であったが、1月には2名だけになった。2012年度の特徴として、TOEIC Bridge150点(TOEIC 470点)以上の成績上位者が、4月には11名であったが、1月には倍以上の27名になった。このように成績の上位者と下位者の点数の伸びが、平均点倍増の原因の一つと考えられる。

2011年から実施の TOEIC Bridge の結果を考慮して、2013年より1年生の英語の最低学力を TOEIC Bridge 100点以上にする。この「最低学力の設定」が、大学教育の質保証になるかどうか確信はないが、大学教育を理解できるレベルの設定である。また、その最低レベルを通過した学生は、自信を持って専門科目を学習し、就職活動に取り組むことができるだろう。大学教育の大きな役割は、学生の基礎学力の形成と社会で通用する自律的学習者の育成である。但し、大学教育の質保証問題は、高校教育と切り離して考えることはできず、高大連携授業などを通じて高校と連携して取り組むべき今後の大きな課題である。

表 英語の高大連携授業

期 日	参加高校	参加高校生	高大連携授業内容	高大連携授業の担当教職員	備 考
2008年(5日間) 7月23日-27日	1校(普通)	2年生:32名	CASEC GTS (有料) JACET 8000, Chat, Dictation	英語教員(1名), 英語助手, 入試事務チーム	テレビ取材報道 1局 地方新聞取材
2009年(5日間) 7月23日-27日	3校(農業)	2年生:6名 3年生:27名	CASEC GTS (有料) JACET 8000, Chat, Dictation	英語教員(1名), 英語助手, 入試事務チーム	テレビ取材報道 3局 地方新聞取材
2010年(3日間) 7月23日-25日	1校(普通) 3校(農業)	2年生:13名 3年生:20名	CASEC GTS (有料) JACET 8000, Chat, Dictation	英語教員(1名), 英語助手, 入試事務チーム	
2011年(1日間) 7月23日(土)	1校(普通) 2校(農業)	2年生:17名 3年生:9名	自律的英語学習(Many Things) JACET 8000, Chat	英語教員(2名), 英語助手, 入試事務チーム	東日本大震災
2012年(1日間) 7月22日(日)	1校(普通) 3校(農業)	2年生:15名 3年生:14名	自律的英語学習(Many Things) JACET 8000, Chat	英語教員(3名), 英語助手, 入試事務チーム	

自動添削ソフト (CASEC-GTS)の費用: 1ヶ月 900円×100名=90,000円

※この論文は日本リメディアル教育学会第9回全国大会(2013年8月29日、広島修道大学)で発表した「高大連携授業への挑戦」に加筆したものである。

原知章「高大連携の現状と背景」

[http://www.hss.shizuoka.ac.jp/kodai/report\\_01.html](http://www.hss.shizuoka.ac.jp/kodai/report_01.html)

### 参考文献

- 秋田魁新報「大学全入時代：入学前教育盛んに」,  
2011.2.23.
- 秋山英治「高大連携による日本語文章教育の取組」『リメディアル教育研究』第8巻第2号  
日本リメディアル教育学会 2013.
- 天野郁夫『大学改革のゆくえ』玉川大学出版部,  
2001.
- 天野郁夫『大学—挑戦の時代』東京大学出版会,  
1999.
- 勝野頼彦『高大連携とは何か』学事出版, 2004.
- 大津由紀雄・江利川春雄・斎藤兆史・鳥飼玖美子『英語教育, 迫り来る破綻』ひつじ書房,  
2013.
- 高崎経済大学産業研究所『高大連携と能力形成』  
日本経済評論社, 2013.
- 高階 悟「英語リメディアル教育と学力保証」  
『秋田県立大学総合科学研究彙報』第13号,  
2012.
- 日本リメディアル教育学会 監修『大学における学習支援への挑戦』ナカニシ出版, 2012.